



最近、言葉が聴き取りにくいと感じていませんか？

～話せるけれど聞こえない、中途失聴者の

コミュニケーション・バリアフリーのために～

その1：音は聞こえても言葉として捉えられない理由と、その対策

東京通信病院病理診断科
日本医科大学病理学教室
たむらこういち
田村浩一
Koichi TAMURA

はじめに

聴覚に障害をもつと、音により伝えられる情報を適確にキャッチできないだけでなく、人とのコミュニケーションもうまく出来なくなる。しかし、聴覚障害者であることは、外から見てもわからないので、結果として外界から疎外されることも多く、人間関係に障害が出てしまうことすらある。

筆者は40歳の頃発症した難聴が進み、現在は左に人工内耳を植え込み、右の補聴器と併用で暮らしている。手術前の検査で、遺伝性の感音性難聴であることが判明したが、確かに母方の家系は母、祖母、親戚一同の皆が、中年以降に難聴を発症していた。子供の頃から難聴者が身近にいたわけだが、実は自分が難聴になってみて、初めてわかったことがあまりに多い事に驚いた。

聴覚障害者といっても発症時期や難聴の重さ、主なコミュニケーションの手段などによって状況は異なる。

・ろう(あ)者

音声言語を身に付ける前に重度の難聴となった場合
=発声の障害も伴うことが多い
コミュニケーションは手話が主体

・難聴者

ある程度聞こえる人、難聴の程度は様々
補聴器を利用、話し言葉でコミュニケーション

・中途失聴者

話し言葉を覚えてから障害が出た場合
難聴の程度は様々

手話は使えず、コミュニケーションは話し言葉か筆記

コミュニケーションの手段は「多くの場合」であり、「全員が」というわけではありません。

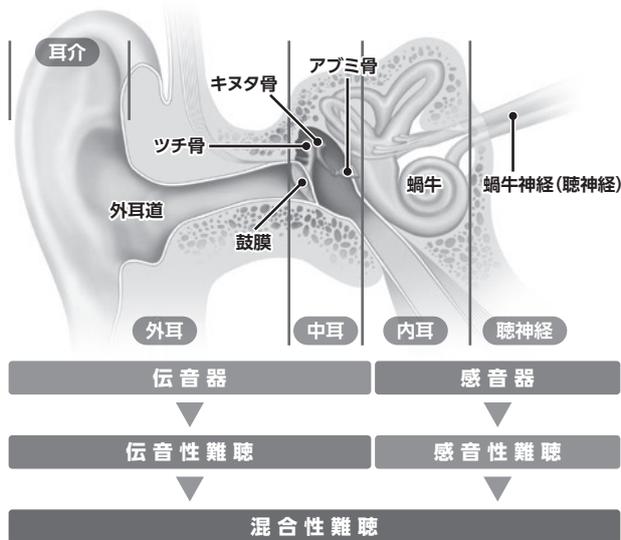
図1 聴覚障害者の種類

り、周囲に求めている対応も違う(図1)。筆者は耳鼻科医でもなければ、聴覚障害に関する専門家でもない。しかし健聴者として難聴のある家族と暮らし、その後自分自身が、片耳の軽度難聴から始まって両耳が侵されて聴覚障害4級になるまで、次第に進行する難聴を体験してきた。本稿では筆者が患っている感音性難聴を中心に、音は聞こえてもなぜ言っていることがわからないのか、難聴者と健聴者がコミュニケーションを図るにはどのような方法があるのか、などについて、実体験を元に解説を試みたい。

I. 聞こえのしくみ

音の波動は外耳を通過して鼓膜に達し、耳小骨から蝸牛へと伝わる。この波動が蝸牛の有毛細胞の線毛を動かすことで電気を生み、その電気刺激が聴神経から脳に達して、音として認識される(図2)。音を波動のまま伝える外耳から内耳までが伝導器、電気刺激に換えて伝える内耳から先が感音器で、前者の障害が伝音性難聴、後者のそれが感音性難聴である。伝音性難聴は耳栓をすることで疑似体験ができるが、健聴者が感音性難聴を体験することは決してできない。これも感音性難聴が理解されにくい理由の一つである。

伝音性難聴は中耳炎や鼓膜の損傷などで生ずるのに対し、感音性難聴は先天性あるいは遺伝性のものの他、騒音や加齢に伴うもの、メニエル症候群などの疾患によるものなどが知られている。原因により分類されているものの、その多くは「詳細不明」と言っても良い。筆者は40歳まで正常な聴力を持ち、その後次第に感音性難聴が進行した。自らの経験



<https://www.widexjp.co.jp/hearing/mechanism/ear-mechanism.html>
 (「みみから。」Widex)より引用

図2 耳のしくみと難聴の種類

(図2は巻末にカラーで掲載しています)

で、感音性難聴では音が良く聞こえないだけでなく、音としては聴こえても言葉の意味がわからないことが大きな問題であることがわかったが、一般の方々はもちろん、医療従事者にすらその理由が十分に理解されていないと感じている。

II. 感音性難聴者は、「音」はある程度聴こえるのに、なぜ言っていることがわからないのか？

1. 全ての音が小さくなるわけではなく、聴こえにくい音の高さがある。

感音性難聴の多くが、蝸牛のある領域の有毛細胞の線毛の動きが悪くなることで、その領域の音が聴き取りにくくなっている。一言で感音性難聴と言ってもその中に、高音が聞こえにくい人もいれば、低音が聴こえ難い人もいる、と考えてもらえばよい。今は差別用語として使われなくなったが、昔のことわざに「^{つんぼ}聾の早耳」という言葉がある。その意味は、一つは聞こえないのに聞こえたふりをして早合点することだが、もう一つ、都合の悪いことは聴こえずに悪口などはよく聞こえる、という意味で使われる。後者は嫁姑の争いで出てきそうなセリフだが、実は難聴者がわざと聞こえないふりをしているわけではなく、ヒソヒソ話の音域が「聴こえる領域」であれば、声は小さくても聴き取れることがあるから起こ

る現象なのだ。

ただし蝸牛では、入り口に高音を感知する線網細胞が並び、中層に中音領域、高層に低音領域を感知する細胞が並んでいる。高音を感知する細胞はすべての領域の音に晒されるわけだから、ヘッドホンで大きな音を聞き続けた時には、高音が聴こえなくなることが多い。また加齢にともなって高音が聴き取りにくくなるのは、長年にわたって「音」の刺激を最も受けてきた細胞が疲弊するからと考えると理解しやすい。

「ア」とか「カ」という五十音は、それぞれが単一の音階で出来ているものではない。たとえば「イ」は主に 350Hz 前後の音と 2600Hz 前後の音の組合せからなり、「エ」は主に 700Hz 前後の音と 2200Hz 前後の音の組合せからなる。どちらも低音成分の方が大きい。実際には、これに音の混じり合い方や時間的な変化も加わり、その共通性によって、声の違う人がしゃべっても同じ音声言語に認識できるわけだ。しかし、特に高音領域が聴こえ難くなると、五十音の聴き分けが難しくなる。

「し」「ち」「ひ」をローマ字で書くと、「shi」「chi」「hi」となるが、この「s」や「c」の音が聴き取れなければ、すべて「ひ」に聞こえてしまうし、「sh」「ch」「h」の音が聴き取れなければすべて「い」に聞こえることになる、といえイメージしやすいのではないだろうか。こうして聴き取れない（あるいは間違えて聞こえる）音声は単語の中にあると、言葉の意味を取り違えたり、言葉がわからなくなったりする。1月と7月を聴き間違えるのは健聴者でも起こりうるが、そのような音声が多ければ、日本語にすら聴こえないことになる。図3は、いくつかははっきり聴き取れない音声があると、まったく意味がわからなくなり、知らない外国語を聞くのと同じになる、という例である。

2. 大声はかえってわからない

相手に難聴があることがわかると、人はなるべく大声で話そうとする。しかし感音性難聴では、大声だから聴き取れるとは限らない。声が大きくなっても、聴こえる領域の音ばかりが強調され、聴こえない領域の音は、かなりの音量になってもやはり聴こえないままで、前述の shi と chi はやはり聴き分けられないということも起こりうる。

あいきけんひたちはえろぎだいさらひじじゅうすあどういう
たれしたさらちのせいたんひとしてたんじょうしました。

あいきけんひたちはえろぎだいさらひじじゅうすあどういう
ち ち し どじ しぎ つがと にゅ
たれしたさらちのせいたんひとしてたんじょうしました。
さち し さち は

愛知県知多市は江戸時代、晒技術が導入され、
「知多晒」の生産地として繁盛しました。

⇒知らない外国語を聞くのと同じになる！

図3 感音性難聴の聞こえ方

単語の中に聞き取れない(聞き間違える)音声がある場合、
上段のように聞こえる。これではまったく意味がわからない。

大声の問題点はそれだけではない。内耳の障害があると、感音系が誤作動を起こし、音の大きさの感じ方が正常とかげ離れて鋭くなっている。そこで、少し大きさが増したことを、正常より非常に大きく感じてしまうのだ。これを聴覚補充現象(リクルート現象)という。筆者が突発性難聴との診断で10日間入院し、結局聴力は回復せずに退院した直後、軽度の難聴があるはずなのに、レストランでの食器の立てる音や、スーパーマーケットの音楽入り場内放送といった外部の雑音が異常に大きく聞こえ、不快に感じて戸惑った。このような誤作動で、大声だけが叫び声のように歪んで聞こえることもある。一方で、大声を出すというのは、しゃべっている方も興奮状態になりやすい。その結果、「そんなに怒鳴らないで!」「怒鳴ってなどいない。お前が聞こえないから大きな声を出しているだけだ!」という言い合いが家族間で起こることにもなるのである。

3. 周囲がうるさいと、耳元で話されても聞き取れない

感音性の難聴を思うと、立食パーティーが苦手になる。それは、皆がおしゃべりをしている中で、誰かと個別に会話を交わすことが難しいからだ。

健聴者は立食パーティーの会場で、聴こうと思えば少し離れたところにいる人の会話を聞き取ることができる。それは単に「耳が良いから」だけでなく、人間には聴きたい音だけを選別して聞き取るという能力が備わっているからなのである。この時に、脳はかなり高度な処理過程をしている。たとえば、

5mくらい離れたところで誰かがしゃべっているでしょう。すると、脳は話し手の性別や声の高さだけでなく、5mという「距離感」に合う音、さらに「口元の動き」などの視覚情報に合致する音声だけを選択して抽出してインプットし、他の音は「雑音」として、情報の入力を排除するのである。多種類の音が混じった騒音の中で、特定の人の声だけを聞き取ることができるのも、この選別能力があるおかげなのだ。残念なことに、感音性難聴ではその能力が失われてしまう。そのため同じ高さの音だと、雑音と人の声の聞き分けがほとんどできない。難聴者が、テレビのニュースのアナウンサーの言葉は聞き取れるのに、効果音の入ったドラマのセリフは、音を大きくしても聞き取れないのはこのためなのである。

4. 早口で話されてもわからない

感音性難聴では、早口の会話についていかれなくなる。このため、高齢の難聴者は認知症があると誤解されてしまうことも少なくない。感音性難聴では、思考能力は正常であっても、聞こえた音を処理する、つまり言語として正しく認識して、その意味を理解する能力が低下してくる。そうなる一つ一つの単語を認知するのに時間がかかるので、機関銃のように言葉が聞こえても、まったく意味が捉えられない。もちろん、言葉の中で正しく聞き取れない音声も増えるから、コミュニケーションが成り立たなくなるというわけだ。

英語で話しかけられた時、ゆっくり話してくれればいくつかの単語が聞き取れて意味がわかるのに、早口でまくし立てられると何を言っているのかさっぱりわからない、という経験はないだろうか? 感音性難聴者にとっては、日本語の聞き取りもそれと同じになっている、と考えれば理解しやすいと思う。

5. 聴覚障害は静寂の世界ではない

難聴者の中でも特に、人生の途中で聴力に障害を発症した中途失聴者の多くが、日常生活で最もつらいと訴えるのが耳鳴りである。医師を含めてほとんどの健聴者が、聴覚に障害があって音が聞こえなくなるというのが、「音のない世界で暮らすことになる」と誤解している。しかし自分が難聴になって最も苦しんだのは、絶え間なく鳴り響く耳鳴りの「音」だった。何かに集中すると少しは気にならなくなる

のだが、耳鳴りの音が集中を妨げる。周囲が静かになれば余計に、頭の中で音が鳴り響き続けるので、睡眠薬がなければとても寝付けるものではない。スイッチを切りたくても切れない雑音が、一生鳴り続けるのである。自分が「耳鳴り」に何とか慣れてきたのはごく最近のことで、発症から20年以上かかった。その間に、耳鳴りから解放されるには死ぬしかないのかと、自殺を企てたことすらある。

耳鳴りと同じ高さの音の場合、音が被って聴きとりにくくなる気がするが、「耳鳴りがあるから、耳鳴りの音が邪魔をして聴こえない」ということはないと言われている。ただし、感音性難聴者が感ずる耳鳴りは、聴こえにくい音域の音の刺激が脳に入っていないため、脳が過剰に反応してその領域の音を聴き取ろうと興奮し、誤作動を起こすためと考えられており、耳鳴りのある領域の音が聴こえない、という感覚は正しいように思う。

耳鳴りの原因はまだ不明な点が多く、有効な治療法もない。日本聴覚医学会の耳鳴り診療ガイドラインでも、現状ではまだ「慣れるしかない」という見解のようである¹⁾。ただし、慣れるために補聴器を有効活用する方法が試みられており、耳鳴りを「消す」ことができなくても「気にならなくなる」ことは十分に期待できる²⁾。

Ⅲ. 難聴者とのコミュニケーションで 気を付けたいこと

1. 健聴者側に求められること

1) 初めて話す相手の場合、難聴があることを察するのが大切

音声言語でのコミュニケーションを主体とする中途失聴者で、特に軽度から中等度の難聴の場合、外から見てもわからない難聴を、あえて人に知られたくないと思っている方が少なくない。外から見えない耳穴式の補聴器が選択される事が多いのも、そのためと思われる。多くの中途失聴者は、聴こえが悪くても、しゃべることは普通にできる。相手はどうしても「しゃべっているのだから聴こえるはず」と思ってしまう。ここでコミュニケーションのバリアが生まれているわけだ。ちょっと聴き取りにくそうな様子が見られたら、「聞こえないのですか？」で

はなく、「私の声は聴きとりにくいですか？」と訊ねる心遣いが欲しい。

医療の世界で重要なインフォームドコンセントも、聴き取れない部分があったり、聴き間違えたりしたまま「わかりました」と言われては、意味をなさない。たとえ誤解があったとしても、話した側も聞いた側もそれに気づくことがないのだ。一般の小学校に通っていた先天性難聴の子が、先生の質問に反応しなかった時、先生は「聞こえなかったら聞こえなかったと言いなさい！」と叱った、という話がある。インフォームドコンセントで「今の説明でわからなかったことはありませんか？」というのが、いかに愚かな質問か、この逸話をもとに気付いてほしい。「わからないこと」に気が付けるのは、少なくとも言葉がきちんと聴こえていることが前提なのだ。したがって特にしっかりと伝えなければならぬような大切なことは、やはり「文字」で伝えるべきであろう。

2) 話は大き目な声でゆっくりと

必要以上の大声、早口は禁物である。相手の目をみて、ゆっくり、はきはき話すように心がけたい。日本語はもともとイントネーションの少ない言葉であり、強弱なしに連続して話し続ける状況になりやすい。それは難聴者にとっては、言葉の区切りがわからず、聴き取りにくさに繋がる。ゆっくり話すことで自然と抑揚がつき、強調したい言葉が伝わりやすくなるメリットがある。

1対1での会話はもちろん、グループでの会話では、話の内容がわからないまま、笑い声だけが聴こえるのもつらいものだ。しかし楽しそうに会話が弾んでいる時に、聞こえなかった点を聞き返して話の腰を折るのは申し訳ないと思うし、言葉を挟むのにも勇気がある。そこで、話の内容が十分に聴き取れなくても、頷いて聞き続けることになる。1対1の会話で、自分が一方的に話をしているだけの状況を感じたり、グループでの会話で難聴者が一人だけ取り残されている感じが感じられたりしたら、ちょっと「わかりやすさ」を考えた話し方を工夫してほしいと思う。

3) 聴き取れない音声の伝え方

難聴者が話を聴きとれなかったり、聴き間違えたりするのは、全ての音が聴こえないからではなく、単語の中のある音声の伝え方

多い。たとえば雨具の「カッパ」が「タッパ」に聞こえたり「ハッパ」に聞こえたりする。「か」が聴き取れていないことがわかると、健聴者は「だから、カッパ!」と大声で連呼したり、「かきくけこの“か”!」と五十音の行で伝えようとしたりする。大声でもわからない理由は先に述べた。五十音図の「か行」で言われても、各行のあ段、つまり、「あ」「か」「さ」「た」「な」…の聴き分けができないのだから、わかるはずがない。

「か」を伝えなければ、「カンヅメの“か”」など、その音を含む別の単語で示すか、「レインコート」など、「カッパ」を別の単語で言い換えるようにすれば、通じる可能性が高くなる。

英語では電話などで聞き間違いの多いアルファベットに対しては、通話表を使って国の名前の頭文字などで伝えるのが一般的なようだ。筆者がアメリカ東海岸に留学していた時に、自分の名前 TAMURA のスペルを伝えるには、TはTomのT、MはMaryのMと人の名前で示していた。相手に「MaryのMか、NancyのNか？」などと聞かれることも多かったので、聞き間違いやすいアルファベットを名前の頭文字で伝えるやり方も一般的なのだと思う。日本語でも無線局運用規則の「和文通話表」というものがある。参考までに図4に挙げておくが、無線通信のために昭和25年に定められたもので、使われている単語も古くさい感じがあり、残念ながらあまり一般的に使われてはいない。

4) 主語と述語がわかるように

聴力検査の中の言語弁別検査(言語明瞭度)は、ある単一の音声を聞かせて聴き取れるかどうかを調べる。通常、20語中の正答率で表すが、これが50%以下であると、過半数の音声为正しく聴き取れないということになる。しかし、その音声を含む「単語」として聴き取りを調べると、正答率が上がる。さらに簡単な「文章」として聴き取りを調べると、格段に正答率が上がるのである。これは、一つの音声聴こえなくても、文章として矛盾のない単語に「聴きとる」からだ。通常の会話でも、人はある程度話の見当をつけて対話している。それが予想外の単語が出てくるとお手上げになるし、想像している話の内容と違った場合に、聴き取れなかったり聴き間違えたりすることになる。

会話を成り立たすためには、何の話をしているのかを明確に伝えることが大切である。つまり「主語」と「述語」さえ明確に伝われば、話の内容が予測でき、「聴き取れない」音声も、あえて意識せずとも想像で補いながら聴くことができる。一方的な話に相手が頷いて聞いているだけでは、正しく聴き取られているかわからないが、対話が成りたてば、聴き間違いがあった時に話し手が気づく可能性も高くなる。話が伝わり難ければ、主語と述語だけでも書いて伝えれば、誤解も避けられると思う。

日本語の会話では主語や述語を略したり、会話を盛り上げるために長い修飾の言葉や前提を先に話し

和文通話表				
ア 朝日のア	イ いろはのイ	ウ 上野のウ	エ 英語のエ	オ 大阪のオ
カ 為替のカ	キ 切手のキ	ク クラブのク	ケ 景色のケ	コ 子供のコ
サ 桜のサ	シ 新聞のシ	ス すずめのス	セ 世界のセ	ソ そろばんのソ
タ 煙草のタ	チ ちどりのチ	ツ つるかめのツ	テ 手紙のテ	ト 東京のト
ナ 名古屋のナ	ニ 日本のニ	ヌ 沼津のヌ	ネ ねずみのネ	ノ 野原のノ
ハ はがきのハ	ヒ 飛行機のヒ	フ 富士山のフ	ヘ 平和のヘ	ホ 保険のホ
マ マッチのマ	ミ 三笠のミ	ム 無線のム	メ 明治のメ	モ もみじのモ
ヤ 大和のヤ		ユ 弓矢のユ		ヨ 吉野のヨ
ラ ラジオのラ	リ りんごのリ	ル るすいのル	レ れんげのレ	ロ ローマのロ
ワ わらびのワ	ヰ あどのヰ		ヱ かぎのあるヱ	ヲ 尾張のヲ
ン おしまいのン	・ 濁点	° 半濁点		
一 数字のひと	二 数字のに	三 数字のさん	四 数字のよん	五 数字のご
六 数字のろく	七 数字のなな	八 数字のはち	九 数字のきゅう	〇 数字のまる
一 長音	、 区切点	」 段落	(下向括弧) 上向括弧

図4 和文通話表

たりすることも少なくない。しかし難聴者にとって、そのような会話についていくのは大変だ。何の話かわからないまま、何とか長い前置きを聞き取ろうとしているだけで、疲れ果ててしまうことも知って欲しい。

2. 難聴者側に求められること

1) 難聴者側の問題

難聴者側の問題として挙げられるのは、「聴こえたふり」をしてしまうことだろう。それは、難聴を知られたくないと思う気持ち、あまり聞き返しては申し訳ないと思う気持ち、あるいは、あきらめや面倒くさいという気持ちから生じている。その結果、困った顔をしてみせるか、わかったふりをしてうなずくか、または相手に合わせて微笑んで済ますか、つまり英語圏に旅行した時の英語がしゃべれない日本人観光客と同じ反応をしていることが多い。

もう一つの問題は、言葉が聞き取れなかった時に、「は?」「え?」という聞き返しや、「聞こえません」という表現をしてしまうことである。これでは相手に「会話の内容が把握できていない」ことは伝わらない。話し手は、自分の声が小さくて聞こえないのかと思い、やや大きな声で、同じ話を同じスピードで繰り返すことになる。難聴者は、さらに繰り返して聞き返す気にはなれず、わかったふりをして話を終わらせることが少なくないと思う。

2) 会話の中で、難聴者側にできること

初対面の相手に対して、「難聴があるので、少し大きな声でゆっくり話して下さい」と伝えるのは、決して恥ずかしい事ではない。多くの人は、きちんと対応してくれる。銀行やみどりの窓口など、あらかじめ目的がはっきりしている場合、筆者は難聴があることを含めて訪れた目的を紙に書いて持っていくようにしている。口で説明するよりも親切に対応してもらえるように思う。

耳が遠い、ということをあえて伝えたくない場合でも、コミュニケーションをやめてしまっただけは人生の楽しみが半減するどころか、人と関わって生活することができなくなるのは困る。やはり難聴者側でも「正しく聞き取る」工夫は必要だろう。

家族や親しい人との会話の場合、先に述べたように主語を略し、早口でまくしたてるように話すことも多い。話題が突然飛んでも健聴者は笑ってついて

いけるかもしれないが、聞き取れない音声を想像で補いながら聴いている難聴者は、何の話をされているのか見当すらつかなくなり、会話が苦痛になる。そのような場合、まず何の話題かを確認することが大切である。尋ね方も、「何の話をしているの?」と聞くと、聞き取れなかったのではなく、聞いていなかったと受け取られることがあるかも知れない。むしろ具体的に「スポーツの話?」とか「テレビドラマの話?」などと聞いてみる方がよいだろう。頓珍漢な問いになっても、聞き取れていないことは通じるから、コミュニケーションを続けることができる。

さらにどこまで聞き取れているのかを相手に伝える工夫も必要である。例えて言えば「誰が引退したって?」と聞けば主語がわからないことが伝わるし、「イチローがどうしたって?」と尋ねて述語がわからないことを伝えることができるのである。



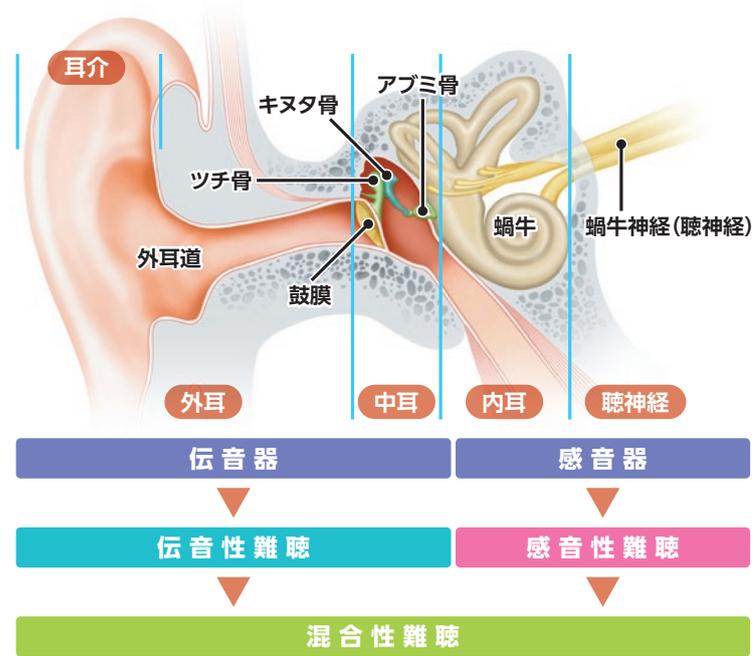
自分で話ができるのに聞こえない、というのは外から見てわからない障害である。初めに聴力に障害があることを伝えると気をつけて話してくれる。しかし、話しているうちに相手はそれを忘れて、健聴者に対するのと同じような話し方で会話を続けるようになるのは、無理もないことかもしれない。しかし、中途失聴という聴覚障害は決して特別なものではない。90歳を超えて聴力が衰えていない超高齢者をみると、大したものだと驚くのは、年を取れば耳が多少遠くなるのは当たり前、と考えていることを意味する。中途失聴は他人事ではなく、今後、年取って自分の聴力が衰えていく可能性は決して低くはないし、家族や仕事先の仲間など身近な人の中で聴覚に障害をもつ方に出会う確率は高くなっていくと言ってもよいだろう。そのような中途失聴者とのコミュニケーションに対するバリアを無くすためには、まずは個人個人が障害を正しく理解し、コミュニケーションをとる方法を知ることが大切だと思う。

本稿が“最近、言葉が聞き取り難くなってきた”と感じておられる方だけでなく、周りの家族や職場の方々に対する「中途失聴者のトリセツ（取扱説明書）」として少しでも役立てて頂ければ幸いである。

文 献

- 1) 日本聴覚医学会(編集)耳鳴診療ガイドライン2019年版
東京 金原出版
- 2) 新田清一：最近の耳鳴治療について～‘治らない’から
‘慣れる’、そして‘治る’へ
モダンメディア 2019: 65: 58-63

(P.37 掲載)



<https://www.widexjp.co.jp/hearing/mechanism/ear-mechanism.html>
〔「みみから。」Widex〕より引用

図2 耳のしくみと難聴の種類